

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	Yunlong Liu
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員 環境情報学部教授	中浜 優子
	副 査	政策・メディア研究科委員 環境情報学部教授	田中 茂範
		政策・メディア研究科委員 総合政策学部教授	藁谷 郁美
		慶應義塾大学 環境情報学部名誉教授	霜崎 實
学力確認担当者：			
(論文審査の要旨) Yunlong Liu 氏から提出された博士論文は、The Use of Listening Comprehension Strategies to Facilitate Recall: The Effects of Learner L1 Background and Proficiency (リコールのための聴解ストラテジー：学習者の母語と第二言語の熟達度が及ぼす影響)と題し、6章から成るものである。 今まで、数多くの L2 聴解ストラテジー研究が報告されているなか、L2 学習者が後に聴解内容をリコールするために、どのようなストラテジーを使用しているのかを調査した研究は、ごくわずかである。Liu 氏の研究は、標準テストとして最も知名度が高いともいえる TOEFL のリスニング問題の内容をリコールするため、学習者がどのように聴解ストラテジーおよびノートテイキングストラテジーを使用しているかを調査したものである。TOEFL の長文リスニング問題は、最初に設問を見ることができないため、レクチャーを聴きながらのちにその内容を思い出すために工夫をしないとイケないことから、のちのリコールのためのストラテジー使用が見込まれるということに着目し、学習者の母語と英語熟達度レベルがそれらリコールのためのストラテジー使用にどのような影響を与えるのかについて考察したものである。母語要因は日本語と中国語の2水準、熟達度要因は、中級と上級の2水準で比較をしたのであるが、このように母語・熟達度という二要因と聴解ストラテジーの関わりを調べた点が画期的であり、分野での貢献度も高く、教育的示唆にも富んだ研究である。 以下に、本論文における各章の概要を述べる。 第1章では、まず、本研究の意義について述べられている。本研究の一つ目の特筆すべき特徴としては、従来の研究で明らかにされていなかった、後に予測されているリコールのためのストラテジー（リコールのためのノートテイキングストラテジーを含む、聴解ストラテジー）に着目したという新規性があげられる。二つ目の特徴としては、日本語と中国語を母語とする英語学習者のストラテジーの特色を、2つの異なる熟達度レベルで比較した点である。またどの分野においても重要視されるべきである、操作的定義も述べられており、本研究の骨子となる専門用語について自身がどのような理由でその定義づけを援用したのか等、当たり前ではあるが、本論文をより理解してもらえるために、重要な部分が抑えられているのは好ましいことである。 第2章は、大きく分けて二つのテーマにおける先行研究のまとめがされている。一つ目は、聴解ストラテジー研究で、聴解ストラテジーを使用しない学習者に比べ、それを上手く使いこなしている学習者のほうがよりの確に聴解内容のリコールできているという結論である。しかし、数少			

ないリスニング内容をリコールするための聴解ストラテジーの使用における研究では、ストラテジーと英語熟達度レベルの間での相関が見られないものがある一方、他のリコール研究では、熟達度が上がるとストラテジーをうまく駆使する力も伸びていることが報告されており、見解の一致は見られていない。この研究成果の不一致をLiu氏は、ストラテジーの分類の括りが大きすぎたのではないかとし、ストラテジーをさらに細分化するとともに、従来のデータ収集方法がアンケート調査に限られていたのに対し、インタビューを加えるという、研究手法の多様化を試みることで、デザイン面での改善も試みた。次に、リコールのためのノートテイキングストラテジーについては、中国語、日本語を母語とする英語学習者によるノートの質と量、そして英語母語話者のそれとの比較により、学習者の母語がノートテイキングストラテジーの使用に与える影響はまだ解明されていないとしている。

これらの先行研究の結果及び問題点を踏まえ、以下の4つの研究設問を挙げ、2章を括っている。

- 1) 聴解内容をリコールするため、中級英語学習者と上級英語学習者が使用している聴解ストラテジーにはどのような違いがあるのか。
- 2) 聴解内容をリコールするため、中国人英語学習者と日本人英語学習者が使用している聴解ストラテジーはどのように違うか。
- 3) 中級英語学習者と上級英語学習者が使用しているノートテイキングストラテジーにはどのような違いがみられるか。
- 4) 中国人英語学習者と日本人英語学習者が使用しているノートテイキングストラテジーにはどのような違いがみられるか。

第3章では、本研究の調査対象、研究手続き、ノートテイキング評価基準、分析方法等について述べている。対象者は、中国人英語学習者30名と日本人英語学習者27名で、TOEFLとTOEICのスコアにより、中級英語学習者と上級英語学習者それぞれ33名と24名に分けられる。さらに、講義理解内容に関するTOEFL聴解問題（科学系と文化系）とアンケート調査、さらにポストホックインタビューの手法についての説明がされている。質問項目は計13項目であり、後にこれらの質問項目に回答するために、どのような聴解ストラテジーを使用しているかを中心に調査している。調査結果は記述統計と頻度統計を用いて分析する。そして、聴解ストラテジーの具体的な使い方や、ノートテイキングに対する態度などについて、フォローアップインタビューで詳しく調査している。アンケート調査の結果は記述統計と頻度統計で分析し、研究設問1と2を明らかにし、研究設問の3と4を、2要因の分散分析で結果を分析すると説明がなされている。

第4章では、本研究の結果を報告している。上級英語学習者は、講義の概要をつかむことに集中すべく聴解内容をリコールする傾向が見られた。そして、接続表現の次に重要箇所があることを理解していたのか、and, but等の接続表現に着目していることが分かった。また、後のリコールのために、ノートテイキングを上手く活用していることも分かった。一方、中級英語学習者は、個々の単語や、リピードされている語彙でリスニング内容をリコールする傾向が見られ、講義の全体像をつかむというストラテジーは使用してはいなかった。

また、中国語を母語とする英語学習者には、講義の概要および、接続表現への着目の傾向がみられ、ノートテイキングでリスニング内容をリコールしているのに対して、日本語を母語とする英語学習者は、個々の単語や、リピートされている語彙でリスニング内容をリコールするとともに、中国語母語話者同様、接続表現の後の事項に着目しているということも明らかになった。そ

して、上級英語学習者のノートには、内容語や記号がよく多く見られ、中級英語学習者より、聴解問題の回答に直接導くヒントとなるようなノートテイキングが多いということが分かった。また、日本人英語学習者に比べ、中国人英語学習者のほうが母語である中国語によるノートテイキングをする傾向が窺えた。

第5章は、本研究の結果の考察からなる。上級学習者は中級話者に比べ多くのスキーマを持つことから、そのスキーマ化された記憶を単位としながら情報を処理することができ、作動記憶への負担が軽減されるので、入ってくる情報により多く注意を払う資源の余裕が出てくる。それで、英語の熟達度が高くなると、情報処理単位が大きくなり、聴いた講義内容の概要をつかむためのストラテジーを選択するのではないかと論じている。また、反対に中級レベルになると、情報処理単位が小さくなり、単語レベルで処理をするので、個々の単語や、リピートされている語彙でリスニング内容をリコールしたのではないかと思われる。

また、日本語を母語とする英語学習者と中国語を母語とする英語学習者との間のノートテイキングに見られた一番の大きな違いは、その言語が中国人英語学習者では、母語の中国語であったのに対し、日本人英語学習者は第二言語の英語であったということである。これに関しては二つの可能性が考察されており、1) 中国語と日本語の英語からの言語類型論的距離、そして2) 外国語指導の影響である。特にインパクトのある1)の考察について説明する。今までの先行研究からは、学習者が母語でノートをとるということは、4つのステップ(認識・意味的分析・意味的再構築・表現)から成り立っているとされており、かなりの認知的負担が強えられることから、本研究で日本人英語学習者が行ったように、負担を軽減するために、外国語学習者は通常第二言語でノートをとるのではないかとということが予測されるのである。それにも拘わらず、本研究の中国人英語学習者の多くは中国語でノートをとったのであるが、その理由としてLiu氏は、中国語と日本語の、それぞれの英語との統語的類似性と相違性を論じている。日本語はご存知の通り、語順がSOVであるのに対し、中国語、英語はSVOである。日本人の学習者が、母語で単語レベルでノートをとった場合、意味を再構築する際に、主語・目的語・動詞の順でそのまま再構築すると間違った回答に繋がりがかねない。他方、中国語を母語とする学習者の場合、単語レベルで、母語でノートをとっても、意味の再構築の際に、母語と同じ統語システムをとる英語での再構築は、単語を中国語から英語に置き換えただけで、認知的負担度が日本語を母語とする学習者に比べてさほど高くないからではないかと、この論考を提供している。従来のノートテイキングの研究では深く掘り下げられていなかった的確な考察であり、また中国語と日本語という、統語的観点から見た、英語からの距離が近い言語と遠い言語を母語とする学習者を比較したからこそ得られた論考で、言語転移の研究の分野にも大きく貢献のできる考察であるといえる。

最終章の第6章では、結果のまとめと本研究の限界・今後の課題、そして教育的示唆が述べられている。本研究では、質問紙とインタビューの二通りのデータ収集方法であったが、ストラテジーを自己申告制で選択方式で報告させるという方法では、ストラテジーと認識していないうちにスキルとして使っている方法は記録されていないという危惧もある。本研究が聴解の研究であることから、対象者の内省を発話思考法で収集するわけにもいかないため、例えばディクトグロスといった、ディクテーションの内容をグループで討論させ、学習者に協働的に内容を構築させる、といったようなデータ収集方法で捉えるのも一つのやり方であると論じており、リコールプロトコル、質問紙調査、インタビュー調査の三通りのデータ収集法がより信頼性の高い方法だと提案されている。また、そこから、さらに派生させ、上述のような学習者の協働的作業の聴解エ

論文審査の要旨及び担当者

No.4

クササイズと伝統的な教師主導型の聴解エクササイズとの比較研究も遂行に値すると提言している点からも、学習者の言語学習における自律性、コミュニケーション型な言語学習活動を重視している研究者としての姿勢も表明されているのが分かる。

以上、本研究論文を通して、Liu氏は英語教育の分野で優れた研究活動を行うのに必要な豊かな学識および問題発見能力、そして結果を鋭い観点から考察する能力を有していることを十分に示したといえる。また国際学会で、氏にとっては第二言語である英語での口頭発表および、海外の研究者と活発な議論をこなし、またその能力が評価されていることから分かるように、国際的にも十分通用し、これからもさらなる活躍が期待できる研究者といえる。よって、本学位審査委員会は、Yunlong Liu氏が博士（政策・メディア）の学位を受ける資格があるものと認める。